

日本的経済の再考

——二宮尊徳と渋沢栄一の教えから——

木村 壮次

要 旨

日本経済の発展には、戦前までの偉大な先人の経済に関しての教え、取り組み方が大きな要因となっている。現在の繁栄を築くに当たっては、先人の貢献が大きいの中でも二宮尊徳は農民を中心に教育、指導し、あるべき人間の道を教え、日本人の共同体意識を醸成した。尊徳の教えは子供だけでなく、すべての日本人にとって極めて重要である。

渋沢栄一は明治に入って商工業者が本来あるべき姿を論語によって実践、指導した。渋沢は、経済とは何か、利益とは何か、国家の発展はそれらとどのように関係しているかについてもわかりやすく説明している。この渋沢の教えは戦前の経済人としては、必須の知識であったと考えられ、その意思を引き継いだ経営者の伝統が今日の日本を築いた。昨今、経営者等の道徳・倫理的な未熟さによって不祥事が多発しているが、渋沢の教えを思い起こすことが重要である。

はじめに

現在の日本は世界第2位の経済大国である。敗戦という大変革を経験しながら、戦後の日本は焼け跡の中から復興を達成し、さらに欧米の技術・文明を吸収してこれを日本人に合った構造に作り変え、世界を動かす経済大国となった。

経済大国であるか否かはGDP（国内総生産）で計る。最大の経済大国はアメリカで12.4兆ドル、世界全体の3割強を占め、第二位が日本の4.5兆ドルで1割である。アメリカのように領土及び人口が大きな国の経済大国は当然としても、この小さな島国の日本が世界第2位の経済大国であるということは世界に誇っても良いと考える。この経済発展には、戦前までの偉大な先人の経済に関しての教え、取り組み方が大きな要因となっている。

しかしながら、世界が認める経済大国という事実は、教育やメディアではほとんど伝えられていない。むしろメディアでは戦前までに活躍し戦後の発展の素地を築き上げた先人の功績を取り上げず、逆に戦前の教育、道徳を悪者として仕立て上げる方向に傾注した。

戦争を煽ったというメディア自らが犯した罪には口をつぐむといった態度に終始している。日本のマスコミ、メディアの特徴として自虐主義が云々されているが、決してマスコミ自身の自虐ではなく、日本そのものに対する自虐である。

もちろん、自国のことをやたらに自慢するというのも問題であるが、昨今のメディアの“行き過ぎ

た日本駄目論”は、次代を担う子供たち、孫たちに誤った日本観を植え付け、国際的に活躍できるチャンスを失う危惧を感じる。

小論はこうしたマスコミあるいは教育指導によって歪められてきた現在の日本観を改める必要があるとの認識をきっかけとして取りまとめたものである。経済を主にとりあげるが、日本古来の経済の考え方を道徳と関連づけて取り上げ、現在の欧米の経済観との相違点等を若い人たちに知って欲しいのである。

具体的には、現在の日本経済の発展を築くに当たって多大の貢献をなした江戸時代の二宮尊徳と明治の渋沢栄一の生き様、実践力を紹介することである。経済と道徳については、最近になって、アダム・スミスの『国富論』がそのベースとなった『道徳情操論』とともに注目されている。しかし、日本にも古くから経済と道徳の関係についての貴重な教えがあったということを若い世代に知っていたら、後の世代にも引き継いで欲しいという狙いである。

第1章 日本の経済とは

1. 構造改革と経済成長

2007年10月現在、日本経済は1968年からの「いざなぎ景気」(57ヶ月)を上回る最長の景気上昇を続けている。小泉時代のキャッチフレーズを考えてみればおかしな現象である。なぜならば、小泉内閣は「構造改革なくして成長なし」とのキャッチフレーズで改革を断行し、それはまだ道半ばだと言いつつ募っていたのである。マスコミや経済学者は「改革がなくても成長あり(これまでの日本経済もことさら改革を叫ばなくても成長を成し遂げてきた)」と気がついていない。今回の景気回復の主因は07年の経済財政白書でも結論付けているように、アメリカ、中国向けの輸出の増加である。“構造改革”によって内需が経済成長をリードしたのではなかった。それと白書では記述されていないが、日本の経済システムが優れたシステムであったことによるものなのだ。景気回復は“構造改革・規制緩和”とほとんど関係がなくなされたのである。

振り返って見ると、数年前まで日本経済は“沈没する”とか、“駄目なシステム”と騒ぎ、当時の有力なエコノミストが誤った論を撒き散らしていた。当時は“日本駄目論”に組みしな論者はマスコミだけでなく、政府の審議会委員などからはずされていた。経済政策をリードする委員は、日本の伝統を破壊、構造改革を推進する立場の人で固められたのである。

この構造改革は、自由主義を唱えた経済学者のハイエクから来たものである。ハイエクは法律の支配を前提に人間は自由に好きなことを行って良いというものであり、アダム・スミスの自由主義よりももっと大胆である。スミスは教育が国家の関与する公共的なものとしてとらえていたが、ハイエクは市場に任せるべきものという市場原理主義に近い説を唱えた⁽¹⁾。日本における構造改革の嚆矢は1999年2月に小渕首相が組織した「経済戦略会議」であった。この戦略会議において、「日本経済再生への戦略」と題する答申が出された。この答申は、日本経済は“瀕死の状態”にあると位置づけ、これまで日本経済を支えてきた「日本的システム」が、今や経済成長の「足枷要因」となっていると認識に立ったものである。その後の橋本、小泉、安倍内閣の経済運営も基本的にこの答申に沿って運

営された。

ここで推進された「構造改革」は、アメリカの対日経済戦略という政治戦略から生まれたものであることが現在では明らかになっている⁽²⁾。これらの専門家の主張は、「一つの成功事例は他でも適用できるはずだ」という機械論から生まれている。しかし、社会システムは経済学者が考えるほど教科書的単純ではない。つまり、アダム・スミスやケインズのいうところの「専門馬鹿」（もちろん、ケインズはこんな言葉は使っていないが）に陥ってしまったと考えられる。日本の歴史、文化、習慣などについて、一定の総合的な知識があればアメリカ的な構造改革に手放しで迎合することはなかったはずである。

2. 日本という国柄の経済的特徴

日本であれ、アメリカであれ、すぐれた企業の成功に特別の秘訣があるわけではない。ビジネスを成功させるのも理論でなければ計画でもなく、政府の政策ではない。それは人間なのだ。日本的経営に特徴があるとするとするならば、「人間がすべての原点になっている」という点につきる。これは欧米のシステムとかなり異なっている。日本では、経営者の最も大切な役割は、社員との健全な関係を育てることだと言われている。会社の中に家族的な一体感を生み出すこと、言いかえれば、社員の中に経営者と運命を共にしているのだという共同体の気持ちを抱かせることである。日本で成功している企業は、そのほとんどが社員に共同体意識を植えつけた企業である。この点が、企業を構成している人たちを、株主、経営者、労働者の三つのグループにはっきり分けて考えるアメリカとの大きな違いである。

ソニーの全盛時代を築いた盛田はいう。「世界の他のいずれの国でも、この当たり前の経営哲学が応用されているのをあまりみたことがない。われわれ日本の経営者は、それが確かに功を奏することを現実に証明してきたと確信しているのだが…。しかし日本方式を採り入れるのは、外国ではそう簡単なことではないかもしれない。だれもが自分の国の伝統に縛られており、それを変えることに臆病になっているからである。人間第一主義は、掛け値なしに正しいことだが、時によっては大きな冒険であり、非常な危険を伴うことにもなりうる。しかし長い目でみれば私はそれを強調するのだが、トップ経営者がどれほど優秀な手腕があろうとも、またどんなに成功していようとも、企業の将来は結局、そこで働いている人びとの手に握られている。やや大げさな言い方をすれば、会社の運命を左右するのは社員たちなのだ」⁽³⁾と。

日本の経済が他の諸国と異なっている要因に文化的な独自性があるということを述べたが、それではその文化はどのようにして生まれたかを思いつくまま（日本文化がいかにして生まれたなどというのは学者によって異なる）整理してみよう。まず、自然である。日本の自然は美しいが厳しい面もある。桜の春、紅葉の秋、富士の冬は美しい日本の象徴ともなっている。他方、地震、台風、豪雪、豪雨、洪水に見舞われることも多い。こうした自然とともに生活してきたなかで、日本人は自然を崇め、命をいつくしむ心が養われてきた。古来の神道の理念である。

また、多くの日本人は無宗教で宗教心がない人間だと自ら思いあるいは見られているが、実際には、

森羅万象に神が宿ると信じるほど信心深い国民であると言えよう。日本には、宗教的伝統に根ざし数世紀にもわたって生きてきた儀式、習慣、祭りがある。多くの日本人は神を崇めているかどうかは関係なく神社でお祓いを受けて人生のスタートを切り、初詣やお祭りなど神道のしきたりを受け継いでいながら、教会で結婚式をあげ、クリスマスを楽しむキリスト教徒であり、毎日の生活では儒教の影響を受け、お葬式では仏教徒として葬られる。これらは宗教的行事であり無宗教とは言えない。

さらに、明示的な宗教行事とは言えないが、日常的な行いにも宗教的な教えを日本人は尊重してきた。例えば、長く引き継いできた価値観のひとつに、「もったいない」という言葉がある。最近になって、外国人によって再び見直されてきたこの「もったいない」という言葉は、日本人の本質を説明する重要なキーワードである。この「もったいない」という言葉には、天地万物すべてのものは神からさづけられたものであり、決して無駄にしてはならないという戒めが込められている。大自然のすべてのものは聖なるもので、それを利用することは良いが、浪費は悪であるという気持ちを育んできた。だから「もったいない」は、ご飯を残してすてるとか、水をじゃあじゃあ流すとか、紙を無駄に使うとかといったことにも言われる。

物を大事にする、節約するという意味の言葉は、日本以外の東洋にも西洋にも存在するであろう。ただ、日本語の「もったいない」は、単に「節約する」「儉約する」といった経済的な単純な言葉ではなく、物を無駄に使うのは恥であり、ほとんど罪とさえいえるという感覚を身につけさせる意味合いを持っている。これは原油、アルミ、ニッケル、鉄鉱石、銅、天然ガスは90パーセント以上を海外からの供給に依存している地理的・自然条件がそうした行動につながっていると考えられる。逆の側面からいうと、日本人は儉約家でもある。各国に比べて貯蓄率の高さが指摘されているが、お金だけの儉約家ではない。廃品リサイクルのために、家庭でごみを捨てる場合も、金属、ガラスその他を仕分けし、所定の収集場所に運ぶ習慣がついている。

日本は石油ショックによって、無資源国であることを改めて思い知らされ、必死の努力をした。最新のテクノロジーを駆使して発電機の能率向上をはかり、電力消費が少なく、かつ光量の大きい照明器具の開発に努力した。このため、繁華街のネオンの輝きが以前に増して華やかになっても、そこで消費される電力の総量はかつてより少ない。工場は排熱・排ガス利用の技術を次々開発し、自動車会社は車の燃費改善に全力を傾けた。この背景には日本人の「もったいない」感覚があった。そして省エネ・省資源の徹底によって、経済を運営し、結果的には国際競争力を強めていったのである。

3. 日本独自の文化・経済思想

当たり前のことだが、どの国にも文化がある。その文化に従って我々は生活している。グローバル化という美辞に惑わされ自国の文化を捨て去ることは簡単であるが、一度失ったものを再生することは、極めて困難であるし、多大のコストと時間がかかる。急激な変化は人々を戸惑わせる。政治家、経済学者、エコノミスト、経営者等は現在進行させている“構造改革”についてその功罪を検証すべきであろう。世論をリードするメディア関係者の自虐報道も程々にすべきである。

もちろん、時代、環境が変われば、それに応じて制度・慣行は見直しすることは必要である。新し

い時代、環境にあった制度・慣行にする努力はいつの時代でも行われてきたし、今後も行うべきであることはいうまでもない。しかし、本来的にはほとこの国にもそれぞれの歴史と文化が存在するように、経済的な考え方にも大きな差があるはずである。日本の場合、ハンチントンの『文明の衝突』でも紹介されているように独特の文明・文化があり、経済もその影響を受けてきた。西洋文明と言われるものの中には、ドイツ文化もあればイギリス文化もある。このように他の文明圏の中には、さまざまを国や民族、言語、文化があるが、日本だけは一文明、一国家でとなっている。ハンチントンは、世界の文明を西欧文明、イスラム文明、中華文明など八つに分類し、中国大陸の東側は朝鮮半島までが中華文明圏だとし、日本は中華文明圏とは切り離された独立したひとつの文明圏として捉えている。ひとつの文明の中にはさまざまな国が存在し、多様な民族や言語が入り交じっているが、日本の場合は例外であり、経済の発展方法が他の諸国と異なっても不思議ではない。

第2章 二宮尊徳の教え

1. 代表的日本人

二宮金次郎(尊徳)を、かつて世界に知らせたのは、内村鑑三であった。内村は『代表的日本人』を英文で書き、日蓮上人、西郷隆盛、上杉鷹山、中江藤樹と共に二宮尊徳を紹介して、偉大なる日本人を世界に伝えた。内村は、1908年に公刊の目的と二宮を次のように紹介している。

「青年期に抱いていた、わが国に対する愛着はまったくさめているものの、わが国民の持つ多くの美点に、私は目を閉ざしていることはできません。日本が、今もなおわが祈り、わが望み、わが力を惜しみなく注ぐ、唯一の国土であることには変わりありません。わが国民の持つ長所(私どもにありがちな無批判な忠誠心や血なまぐさい愛国心とは別のもの)を外の世界に知らせる一助となることが、おそらく外国語による私の最後の書物となる本書の目的であります⁽⁴⁾」。

そして二宮については農民聖者として褒め称えた。

「この人物は、自分が永遠の宇宙の法を体得していることがわかっていました。尊徳が試みるのに困難な仕事はありませんでした。また、容易な仕事もなく、尊徳の全身全霊をあげる必要がありました。むしろ、尊徳は一生の最期まで、働きに働いた人でした。尊徳は遠い将来のためにも立案し働いたので、その仕事と影響は、今日なお私どもの間に生きているのであります。尊徳の手で再興された数多くの村々の晴れやかな姿は、尊徳の知恵とその計画の永遠性を証するものであります。一方、日本の各地にあって、あちこちに、尊徳の名と教えとにより結ばれた農民団体がみられ、無気力な労働者に対し尊徳の教えた精神を永遠に伝えているのであります⁽⁵⁾」と。

また、尊徳の伝記『報徳記』を書いた富田高慶は、なぜ記録したかを次のように述べている。

「二宮尊徳先生は終生人びとに徳をもって徳に報いる道を教えられた。そのあらゆる行ないもまた、ことごとく徳に報いることにあった。そのためこの良法がさかんに行なわれるようになったとき、当時の人びとは先生のことを報徳先生と称したのである。この書を『報徳記』と名づけたゆえんである。

先生の一代の言行を記録する者がいなければ、後世の人びとが先生のことを知るすべがない。先生のことを知らなければ、いかに富国安民の良法といえども、そのときかぎりでは永遠にはおよばない⁽⁶⁾」。

だから書いたのだという。

2. あるべき人間の道を教えてくれた二宮尊徳（金次郎）

筆者が学んだ時代の小学校の校庭には柴を背にしながらか本を読んでいる二宮尊徳（金次郎）（1787年～1856年）の銅像があった。我々が小学生であった頃にはどこにも見られた校庭の風景であり、地方の古い小学校では現在でも校庭の片隅に存在している。この金次郎は、明治以降の国定教科書で明治天皇に次いで多く登場していた人物という。この修身教科書では、主に少年時代に限っての二宮金次郎が紹介されていた。正しい行いをするように努力する金次郎を手本として孝行・勤勉・学問・自営などが教えられていたのである。これは敗戦直後までの約40年続いた。しかし、教科書では成人した金次郎にはほとんどふれていなかったようだ。

少年時代の二宮の生き方は若者にとって重要な教育の指針であるが、成人した後の尊徳（金次郎）の教えもすべての日本人にとって極めて重要であると考え。小論では実践から生まれた『報徳記』と『二宮夜話』から尊徳の生き方、経済・社会の捉え方を書き残したい。

二宮尊徳は、小田原郊外の農家の長男として生まれた。十代で両親を失い、洪水で土地は耕作できなくなり、兄弟と別れて伯父のもとで成長した。艱難辛苦の幼年時代については『報徳記』に詳しく書かれている。並大抵の貧乏ではなかったようである。自分は貧乏だとか、下流だとか嘆く人はこれを読み勇気をもらうべきである。

尊徳は“自然”は、正直に努める者の味方であるといういわば当たり前の事実を人々に実践を通じて教えたかったようである。尊徳の、改革に対する考えはすべて、“自然”はその法にしたがう者には豊かに報いる、という簡単な事実に基づいていた。この点は今流行の“構造改革”とかなり違う。実践を通じてという強みがあるか否かという点である。現在の評論家、知識人の言論は往々にして結果論、つまり後智慧がほとんどで役に立たない。

“自然”と歩みを共にする人は“人為的な作られた改革”など急ぎはしない。人気取りや一時しのぎのために計画をたて仕事をするようなこともない。“自然”の流れのなかに自分を置き、その流れを助けたり強めたりするだけなのだ。それにより、自らも助けられ、前方に進められるという考えを実践するのだ。尊徳はそのような人物である。

尊徳が若者だったころのエピソードは多くあるが、その一つとして、所有者がいなかった酒匂川の堤防を自分で耕して菜種を作って油屋にもって行き油にしてもらって、その油で灯りをともして勉強したというのがある。なぜ菜種だったかといえば、米を作ると年貢を取られてしまうからだという。このように知恵を絞り、汗を流す少年だった。

また、農具がそろわなかったため頼みにいき、最初は断わられてしまったが、尊徳の行動をみてから、一転何でも貸してもらおうというエピソードがある。それは

「私は若いころ初めて家を持ったとき、^{くわ}鋤がこわれたので、隣家へ行って、鋤を貸してくださいと言ったところが、隣の家の老人は、いまこの畑を耕して菜を蒔こうとしているところだ。蒔きおえるまで貸すわけにはいかない、と言われた。そこで、家に帰ったところが別に仕事もないので、ではこの畑を耕し

てあげましょう、ついでに菜の種も蒔いてあげましょう、と言って、耕したうえに種を蒔いて、そのあとで鋤を借りた。そうすると隣家の老人は、鋤だけでなく、何でも困ることがあったなら遠慮なく申し出なさい。きっと用だてましょう、と言ってくれた⁽⁷⁾]

というものである。

このエピソードに示されたごとく、極貧の尊徳は知恵を出し努力をし、村のなかの不用の荒地を忍耐と信念と勤勉とにより整え沃地に変え、また山の斜面、川岸、道端、沼地などの不毛な土地もことごとく富と生活の糧へと変えていった。その後、尊徳はかなりの資産を所有するようになり、近所の人々から、模範的な儉約家、勤勉家として仰がれる人物になったのである。この尊徳の評判は小田原藩主〔大久保忠真〕の認めるところになり、その名声は遠くまで広まり、諸大名は、領内の貧村再興の助言をえようとして、多くのところから指導の願いがきた。こうして尊徳の教え、つまり現在につながる日本人の生き方、働き方の原点が日本各地に広がっていった。

3. 天道・人道の論

尊徳の思想はその実体験のなかから生まれたものである。学者が机上で得た知識ではない。貧しい農民として、苦勞して田を耕し、血と汗の結晶、身をもって感じとったものである。その教えの基本は“誠（誠実）”である。この単純な教えがすばらしい成果をもたらしたのである。この事を端的に述べた箇所は『二宮翁夜話』の最初の部分（天地の真理）で、我々学者及び実践家も心すべき“誠”の話がでてくる。

「誠の道というものは、学ばないで自然に知り、習わないでおのずから覚え、書籍もなく、記録もなく、師匠もなく、しかも人々がおのずから心に悟って忘れない、これこそ誠の道の本性である。

……尊い天地の経文を外にして、書籍の上に道を求める学者たちの論説は私のとらないところである。よくよく目を開いて天地の経文を拝見し、“これを誠にする”道を尋ねるべきである。……天は何も言わず、しかも四季がめぐって万物が生育するところの、書籍のない経文、言葉のない教戒まで、米を蒔けば米がはえ、麦を蒔けば麦が実るような、永久不変の道理によって、誠の道に基づいて、誠にする勤めをするべきである⁽⁸⁾」。

このように、尊徳は実践からの知識を重視し、学者の教科書的な知識をほとんど無視している。つづく「天道・人道の論」では次のようにいう。

「世界はめぐりめぐって止むことがない。寒さが去れば暑さが来、暑さが往けば寒さがまたおとずれ、夜が明ければ昼となり、昼になればまた夜となり、また万物生ずれば滅び、滅びればまた生ずる。たとえば金をやれば品物が来、品物をやれば金が来るのと同じである。

寝ても醒めても、居ても歩いても、昨日は今日になり、今日は明日となる。田畑も海山もみなそのとおり、ここで薪をたき減らす分は山林で生木し、ここで食い減らすだけの穀物は田畑で生育する。野菜でも魚類でも、世の中で減るだけは田畑・河海・山林で生育し、生まれた子は時々刻々に年をとり、築いた堤は時々刻々に崩れ、掘った堀は日々夜々に埋まり、葺いた屋根は日々夜々に腐る。これが天理の常である。

しかし、人道はこれとは異なる。なぜならば、風雨に定めがなく寒暑が往来するこの世界に、羽毛もな

く、鱗や殻もなく、はだかで生まれてきた人間は、家がなければ雨露をしのぐことができず、衣服がなければ寒暑をしのげない。そこで、人道というものを立てて、米を善とし、はぐさ(水田に生える雑草)を悪とし、家を造るのを善とし、こわすのを悪とする。これはみな人のために立てた道である。それゆえ人道というのである。天理からみれば、これらにも善悪はない。その証拠には、天理に任せておけば、みな荒地になって、開闢の昔に帰る。なぜなら、それが天理自然の道だからである。

天には善悪がないから、稲と雑草の区別をしない。種のあるものはみな生育させる。人道はその天理に従うけれども、そのうちにそれぞれを区別し雑草を悪とし、米や麦は善とするように、みな人身に便利なるものを善とし、不便なるものを悪とする。そこに天理と異なるところがある。⁽⁹⁾」。

そして、人道の大切さを噛んで含めるようにいう。

「人道は人がつくったものである。だから自然に行なわれる天理とは別である。天理とは春には生じ秋には枯れ、火は乾いたものに燃えつき、水は低い所に流れる。昼夜動いて永遠に変わらないものである。人道は日々夜々人力を尽し、保護して成り立つ。それゆえ天道の自然に任せれば、たちまち廃れて行なわれなくなる。だから人道は、情欲のままにするとときは成り立たないものだ。たとえば、満々たる海上には道がないようだが、船道を定め、それによらなければ岩にふれる。道路も同じこと、自分の思うままに行けば突きあたる。言語も同じ、思うままに言葉を出せば、たちまち争いを生ずる。

そこで人道は、欲を押え、情を制し、勤め勤めて成るものだ。うまい食事、美しい着物が欲しいのは天性の自然だ。これを押え、それを忍んで家産の分内にしたかわせる。身体の安逸・奢侈を願うのもまた同じことだ。好きな酒をひかえ、安逸を戒め、欲しい美食・美服を押え、分限の内からさらに節約し、余裕を生じ、それを他人に譲り、将来に譲るべきだ。これを人道というのである」⁽¹⁰⁾。

このような、いわば当り前のことだが、現在の人は忘れてしまった重要なことを尊徳は何度も何度も繰り返していう。換言すると、自然に行なわれるのは天道であり、天理である。人道は人為によるものである。自然に放置すれば人道は行なわれぬ。人道を行なうには人の意志が必要であり、それに伴う勤労がある。天然・自然に放置しておけば、人の生活は成り立たない。だから、人の生活に役立つものを善とし、役に立たないもの、害になるものは排除する工夫をしなければいけない。道徳や教えを広め、刑法によって、ようやく人道は立つというのだ。この当り前のことが現在の日本では忘れ去られているからこそ、マナーの悪さ、利己主義がはびこり、犯罪等が頻発しているのではなからうか。

“天道と人道”の関係と並んで興味深い教えは“善と悪”の関係である。尊徳は、善悪はもと一円で「見渡せば善きも悪しきもなかりけり」とまで言い切っている。

尊徳は人道を作為とみるから、教化し、人の道を説いたのだ。人道がなければ畜生と同じになり、雑草の茂るにまかせたのと変りがない。しかし、善悪を絶対なものと思わないから、絶対の善人がいないと同様に絶対の悪人はいないと考える。そして人には長所もあるが短所もある。その長所を導き出して短所を直すのが教化であるという。近年の環境対策にはこれまで人間にとって不便、害を及ぼすとみなしていた雑草、廃棄物のなかからも長所を見出し有効に活用する動きが強まってきたが、こうした傾向は善悪一円論から見ると面白い。

4. 尊徳の経済—貯蓄論—

尊徳の教えに積小為大せきしょういだい（小を積んで大を為す）という言葉がある。これは分かりやすくいうと、大きな事をしようとするなら、まず小さいことを怠けずに努力しなさい。なぜなら、ちりも積もれば山となるからだ。百万石の米も一粒の米が集まったものであり、千里の道も一歩ずつ歩いて到達するものだからである。これは努力の重要性を述べたものであり、この言葉自体は尊徳独自のものではない。尊徳の独創的なのは、そこへさらに経済で重要な利息の概念を加えた点である。元金というものは利息を生むものだ。もとは小でも利息がつくことによってそれが元金に加わっていく。それをくり返していれば、それが大きなものになる。貸すときも大きくなるが、借りるときも大きくなる。現代のサラ金地獄の怖さがここにある。

善でも悪でも、邪でも正でも、すべて利がついている。元があれば利を生み、利が返ってまた元になり、その元に利がつき、それがくり返されている（福利）のが人生である。富有な者が貧者になり、貧者が富有な者になるのもその道理によるものである、という。

尊徳の思想は、すべて具体的なことがらと結びついていることは先述したが、現在ではほとんど使われなくなった言葉に“分度”と“推譲”というのがある。

“分度”という言葉は、江戸時代は身分を固定させる目的で使われていたが、尊徳はこの言葉を財産相応の計画性というふうに解釈し、予算を立て、その中で生活することを“分度を守る”といている。つまり自分が置かれた立場や状況、分度（生活基準）を踏まえて、それに見合った生活をするのがまず必要で、そのためにはまず自分の収入に応じた分度を定め、その範囲のなかで暮らすよう節約に心がけることが重要であるというわけである。

従って、武士だからこうあらねばならぬとか、百姓はこうあるべきだということではなく、富む者には相応の支出が認められ、借金ある者はその返済が支出の一つの柱になるという個々人の家計にあった“分度”を設定した。身のほど知らずという言葉は“分度を超えた者”である。

“分度”で余ったものを譲るのが“推譲”である。現在の言葉では貯蓄と言ひ換えても良いであろう。分限のうちを節約して余剰を生じ、それを人に譲り、あるいは将来に譲る。これが個人的な規模で拡大再生産に投下され、やがて社会的原資として“推譲”されるとき、この推譲金は、自己から他へ、村から藩へと及び、農民は貧困から解放されると尊徳は確信していたのである。ここに貯蓄の重要性が示されている。日本人の貯蓄率が他国に比べて高かった大きな要因にこの尊徳の“分度”と“推譲”が大きく関わっていたと考えられる。

貯蓄の重要性と経済について、尊徳は次のようにいう。

「多く稼いで銭を少なく使い、多く薪を取って焚くことを少なくする。これを富国の大本、富国の大道というのだ。ところが世の人は、これを吝嗇（けち）だといったり、強欲だという。これは心得違いである。人道は自然に反して勤めることによって成り立つ道であるから、貯蓄を尊ぶのだ。貯蓄は今年のを来年に譲る、一つの譲道である。親の身代を子に譲るのも、貯蓄の法に基づくものである。だから人道は、言ってみれば貯蓄の一法にすぎない。そこで、これを富国の大本、富国の大道というのだ。

……米はたくさん蔵に積んで少しずつ炊き、薪はたくさん小屋に積んでできるだけ少なく焚き、着物は着

られるようにこしらえておいて、なるたけしまっておくことが家を富ます術であり、また国家経済の根源である。天下を富有にする大道も、実はこのほかにはないものだ⁽¹¹⁾。

さらに

「経済には天下の経済があり一國一藩の経済があり、一家もまた同じである。各々別のもので、同日に論ずるわけにはいかない。なぜならば、博打を打つのも娼妓屋をするのも、一家一身上にとっては、みな経済と思うであろう。しかし政府が禁止してみだりに許さないのは、国家に害があるからだ。こういうものは経済とはいえない。眼の前の自分一人の利益だけを考えて、後世にいかなる影響を与えるかも考えず、他人のことも顧みないからである」⁽¹²⁾。

この尊徳の経済観と戦後生まれの経営者、なかんずくベンチャー企業の経営者の違いはなぜ生じてしまったのであろうか。やはり、道徳観の欠如が大きいといわざるを得ない。戦後生まれの学者、戦前の教えを全否定している学者は尊徳をほとんど評価していない。けちとか儉約家とのレッテルを貼り、尊徳の経済観では経済の活性化にはつながらないと否定してしまった。しかし、尊徳の教えはただ、けちを目的に生きよとは言っていない。貯蓄をするのはなぜなのかをも教えている。つまり

「世の中は無事のようにも、変事がないというわけにはいかない。これは恐るべきことの第一である。変事があってもこれを補う道があれば変事がないのと同じであるが、変事があってこれを補うことができなければ大変になる。

……兵隊があっても武器・軍用が備わらなければどうしようもない。国だけではない、家もまた同様である。すべてのことが、余裕がなければ必ず差し支えができて、家を保つことができない。まして国家天下になればなおさらである。人が批評して、私の教えは儉約を専らにするという者があるが、ただ儉約を専らにするわけではなく、変事に備えるためである。また批評して、私の道は蓄財を勤めるという者があるが、蓄財を勤めるわけではなく、世を救い、世を開くためである」⁽¹³⁾。

第3章 渋沢栄一

1. 渋沢栄一の原点

二宮尊徳は主として農民を中心に教育、指導したが、渋沢栄一は明治に入って商工業者が本来あるべき姿を実践、指導した。アダム・スミスは「経済学の父」と呼ばれているが、渋沢栄一は実践者として「日本資本主義の父」であり、その後の日本の大発展をもたらせたという点では、渋沢栄一は尊徳と並ぶ代表的日本人であると考えられる。

渋沢は江戸後期にあたる天保十一(1840)年生まれで、同年に清国(今の中国)とイギリスの間でアヘン戦争が勃発した。42年には南京条約によってイギリスが香港の割譲を受け、植民地化していくという情勢にあり、西欧列強がアジアへの進出を本格化させつつあった。

生まれたのは武蔵国血洗島(現在の埼玉県深谷市)の大きな農家である。農業の傍ら藍玉の製造販売や養蚕なども手がけ、質屋も営んでいた。父親の代には名字帯刀も許されたというほどの、いわゆる

る地方の名家であった。

渋沢が“志”を意識したのは、父の代理で代官と会った時からである。対面した代官の態度が渋沢の将来に大きな影響を与えた。知識がない代官にもかかわらず、相手が百姓という身分であるだけで威張りちらし、軽蔑嘲弄するというのは政治が悪いからだ。そんなことは絶対に許せない。百姓を辞めて立派な人間になり、殿様や代官を見返してやりたいとの“志”である。

この悪代官の経験から渋沢は二つの決心をしたと述べている。一つは、幕府の政治が悪いから潰さなければいけない、ということ。もう一つは、生産業者がみくびられないように、その地位を上げていかなければいけない、ということである。この思いは幕末から明治にかけてフランスに行く機会を得てからますます募ったようだ。ヨーロッパでは町人と政治家が同じパーティーに出席し、身分に全く上下がない、日本もこのようにならなければならないという思いを抱いて帰国した。

また、フランスに滞在しているとき、株式会社という組織を知った。商工業を強くするためには、小資本では駄目で、大資本にする必要がある。そのためには資本を多く集められる株式会社のような組織をつくらなければならない、という現在の経済・経営に通じる考え方である。これは日本経済のその後の発展にとって得た最大の収穫であろう。当時の世界は植民地主義が横行しており、弱肉強食であり、国力が強くなければ何もできなかった。国を強くするには軍事力が必要不可欠だが、軍事には膨大な金がかかる。軍艦でも大砲でも大砲の弾でも、すべてに金がかかる。だから、軍事力を整備しようと思うのなら、まず国が富まなければならない。「富国」でなければ「強兵」はできないのである。

では、富国にするためにはどうすればいいのか。それはアダム・スミスと同じく経済の発展、つまり商工業を発達させることだという。そして富国強兵にしても、商工業を強くするということでも、大きい会社をつくらなければならない。大きな船はつけれない。当時の日本には小資本の組織ばかりだったから、まずは資本を集めなければならない。これがいわゆる渋沢の「合本主義」という考え方であり、この考え方のもとに設立されたのが「商法会所」であった。渋沢がつくった「商法会所」とは、日本で最初の「株式会社」だったのである。フランスから帰国後、徳川慶喜に恩義を感じていた渋沢は徳川幕府を打ち破った明治政府からの仕官要請を“明治政府に仕える気はありません”と断りを入れた。しかし、“明治政府に仕えないと自分の立場が困る”と、慶喜から説得され政府の手伝いをするようになった。

2. 渋沢が行った明治の構造改革

当時は太政大臣が岩倉具視であり、明治維新の三傑といわれた西郷隆盛、木戸孝允、大久保利通が政府の中心人物であった。海外の制度を取り入れる気風は十分にあった。それなくして日本は列強に伍していかなかったからで、当然といえば当然である。

大蔵省に勤めることになった渋沢は、時の大蔵大臣の大隈重信に提言をし、大蔵省改革を断行した。次々と改正を進めて、大蔵省を通じてどんどん政府に提出していった。そのため大蔵省の権威はますます高まり、あたかも政府の全権を握っているかのようであった。現在にも引き継がれている大蔵省

(財務省)の絶大な権限は渋沢の発案から生まれたものであったのである。

改正事項のうち特に重要なものは公債、兌換制度、金融制度、事務分司(事務局の種類)であった。これらの研究のため、大隈の部下であった伊藤博文がアメリカ視察に出かけ、それをもとに渋沢が担当となって制度改革の素案をつくり、さらに日本の国情に合わせた方法を研究していった。このような流れで、渋沢は明治の財政部門の改革の中心に立ったのである。この改革は平成の小泉改革以上に重要な明治の構造改革である。

(1) 廃藩置県の断行

小泉首相の郵政改革でも大騒ぎになったように、改革には当然軋轢も生じる。明治の改革の最も重要な事件が明治四年の廃藩置県だった。廃藩置県とは大名をなくすという意味である。実際、これは大変な改革であったと思われる。何しろつい数年前までは殿様と家来という関係があり、殿様への忠義によって俸禄を得ていた下級武士が、それをすべてなくしてしまおうというのである。

このような大改革である廃藩置県が比較的スムーズに行われた理由の一つに、渋沢の経営感覚の鋭さがあったようだ。もちろん、廃藩置県という大改革をどう收拾するか苦心は“実に一方ではなかった”と渋沢は言っている。改革を実施する過程で、渋沢は“やはり自分は民間で仕事をしたほうがいい”と思うようになった。それは実業界に従事する者にろくな人物がいないからだ、とまで言い切っている。

渋沢はいう。“日本の経済界を見るに、商工業に従事している民間に、指導できる人が絶無です。これではいくら株式会社の方法を教え、いろいろな金融の方法を教えても無駄でしょう。本当は大隈さんや伊藤さんに野に下って商売人となって指導者になってもらいたいけれども、現実においてできないでしょうから、私はこの際退いて、民間事業に身を投じ、及ばずながら率先してみたい。帰京したうえで辞表を出しますから、どうか聞き届けてほしい。”

しかし、大隈から引き止められた。“その志は大いに結構だけれど、今、君がいなくなったら大蔵省が困る。適当な時期が来るまで待て”と。さらに大蔵大臣に就任した井上馨からも、“今は廃藩置県を断行したとはいうものの、本当の仕事はこれからだ。ますます君に手腕を振るってもらわなければいかん。こういう国家の重大なときに辞職するなんてことは賛成できない。実業界の発達をはかることはもちろん必要だが、これは国のためであるから、もうしばらく待て”と引止められた。この時は辞職の意志を引っ込めた。

(2) 産業の育成

明治五(1872)年、大蔵省を辞めた渋沢栄一は、まず金融の整備に心がけた。金融こそ商工業を発展させる最も重要な産業であると考えたからである。そこで、明治六年に株式会社、第一国立銀行開業の手続きをとった。その前年にはすでに渋沢は国立銀行条例を作った。つまり、自らのつくった条例によって、渋沢自らが第一号となる第一国立銀行(現在の三菱東京UFJ銀行につながる)を創設したのである。

同じ年、渋沢は東京抄紙会社という製紙会社をつくった。この会社を創設したのは、銀行ができて紙幣にする紙がないと困ると考えてのことだった。その後もガス会社、保険会社、セメント会社、

鉄道会社、織物会社などの起業に渋沢は大きく貢献した。

取締役会長として在任したものは東京瓦斯会社、東京石川島造船所、大日本麦酒会社、日本郵船会社、東京海上保険会社。監査役として在任したものは日本興業銀行、浅野セメント会社、沖商会、汽車製造会社。相談役として在任したものは北越鉄道会社、大阪紡績会社、浦賀船渠会社、京都織物会社、広島水力電気会社、函館船渠会社、小樽木材会社、中央製紙会社、東亜製粉会社。この外に、韓国でも多くの会社の創立に関与した国際人であった。

これらの産業育成だけでなく、実業教育の普及に努めた。商工業を興すために、渋沢はまず商業教育が重要だと考えた。当時の人の感覚では学問をするのは官吏になるのが目的であって、商業教育を馬鹿にする気風があった。そこで、商業教育を普及させて志の高い人材を育てていかななくてはならないと考えたのである。渋沢が各方面へ働きかけた結果、1884年に商法講習所は東京商業学校と改称し文部省所管となり、神田一橋に新校舎をつくって、87年に高等商業学校と称した。これが後の東京商科大学、現在の一橋大学である。さらに渋沢は教育活動だけでなく、慈善事業にも尽力し、子供のための養育院をつくっている。

3. 渋沢の経済・経営発展論

(1) 利益論

渋沢は、民間人として日本に奉仕したいという志を果たしたが、常に口にしていたのが「論語と算盤」という言葉だった。渋沢の利益論を見ておこう。

渋沢は、実業とは何かという点について、現在の経済学で教えている重要な点はもちろん認識していた。つまり、利益を凶る事で、商工業にして利益を得るといことなしには無意味であると。ここまでは現代の経営者と同じである。しかし、渋沢はさらに重要な指摘をしている。

つまり利益を凶るといっても、自分さえ良ければ他はどうでも良いということではない。最近の企業は消費期限を書き換えたり、工事に手抜きしたりして、不正なことまでして利益を追求していることがしばしば発覚している。これは渋沢のいう利益とは異なる。利益を増加するということは、仁義道徳に基かなければいけない、そうでない利益追求は決して永続するものではないというのである。現代の経営者は心すべき利益論である。

利益を凶ること、仁義道徳の道理を重んずるとい事は、国家が健全に発達し、個人もその恩恵を得て富んで行くのである。単に自分さえ良ければ良いという利己主義では、必らず自分もまた不幸になる。この悪い事態を招く例を鉄道の改札口を使って説明している。つまり、鉄道の改札口を通ろうとするに、狭い場所を自分さえ先に通れば良いとしたならば、誰も通ることが出来ない有様になって共に困難に陥るではないかという。

さらに、後述するように、論語と算盤はあまり関係がないように見えるがその実、極めて密接な関係がある、と説いていた。ここでいう算盤とは利益である。つまり、お金の動きである。渋沢はこのお金についても重要な役割を丁寧に述べている。

「お金(マネー)は貴いものであるとか、貴ばねばならぬものであるとかいうことに関しては、昔から多

くの格言や諺もある。精神を尊んで物質を卑める東洋古来の風習では、お金によって友情まで左右されるのは、人情の墮落思いやられて甚だ寒心の至りであるが、現実には我々の日常でよく出会う問題である。例えば懇親会などというとき必ず飲食する、これは飲食も友愛の情を増すからである。又久し振りに来訪してくれる友人に、酒食を供することも出来ない様では親交も薄くなる。而して是等のことには皆金に関係する。

このようにお金は実に威力あるものであるけれども、お金はもとより無心である。善用されるとか悪用されるとか言うのはその使用者の心にあるから、金は持つべきものであるか、持つべからざるものであるかは容易に判断できぬ。金はそれ自身に善悪を判別する力はない、善人がこれを持てばよくなり、悪人がこれを持てば悪くなる、つまり所有者の人格如何によって、善ともなれば悪ともなるのである。然るに世間の人にはよくこの金を悪用したがるものであるから、古人もこれを戒めて“小人罪なし宝を抱くこれ罪”とか“君子財多ければ其徳損じ、小人財多ければ其過を増す”などと云っている。……いやしくも世の中に立って完全に人たらしにするには先ずお金に対する覚悟がなくてはならぬという事を述べたのである。総じて金は貴ばなければならぬ。老人も、壮者も、青年も、男も女も凡ての人の貴ぶべきものである。

お金は社会における力を表す要具であるから、これを貴ぶのは正当であるが、必要な場合によく消費するのはもちろんよいことである。よく集めてよく散じ以て社会を活発にし、経済界の進歩を促すものであるから、真に理財に長じる人はよく集めてよく散ずる様でなくてはならぬ。よく散ずるとは正当に支出することである、善用することである」⁽¹⁴⁾。

これは景気論のイロハである。

(2) お金よりも信用

事業を始めるにしても、商売を営むにしても、まず先立つものは資本である。どんなに有望な事業を計画しても、資本がなければその事業を始める事は出来ない。また如何に確實有利な商売があっても、資本がなければこれを営むことが出来ない。資本がないために絶好の機会を眼前に見ながら他人の活躍するところを指をくわえて見ていなければならぬ場合もある。しかしながら、資本も万能ではない、もつと大切なのは人である、と次のようにいう。

「資本の価値も、これを活用する人によって定まるのである。例えばここに一人の富豪があると仮定する。その富豪が国家的事業とか、社会的事業とか、その他の道理正しい事のために財産を活用する時は、その資産は非常に価値ある働きをするけれども、もし自分の道楽とか、その他の無用な事に使用する場合には、少しの価値もない計りでなく、かえって社会に迷惑を及ぼす事さえある。従って財産が多いという事のみを以て尊いという事は出来ない。道理正しい使い道を知っている人にして、初めてその財産にも価値があるのである。されば財産を造ることも結構であるが、資本を最も道理正しく活用する途を覚える事が、より以上に大切であると思う。

有望な仕事があるけれども資本がなくて困ると云う人がある。成程、資本がなければ仕事に着手する事が出来ぬから、本人にとっては定めし遺憾であろうし、資本を持っている人をうらまやく思う事もあるが、それはつまるところ愚痴である。愚痴をいうような人は、もし資本があっても、大きなことをやり遂げる人物ではない。資産は無いより有る方が結構であるけれども、一人の資産には限りがある、その限

りある資本を頼りにするよりも、限りのない資本を活用する心掛けが肝腎である。この限りのない資本を活用する資格は何であるかという、それは信用である。一人の資産には限りがあるけれども、世間に信用のある人はその信用が大きければ大きいほど、大きな資本を活用する事が出来る。従って世の中に立って活動せんとする人は、資本を造るよりも先ず以て信用の厚い人たるべく心掛ける事が肝要である。

では社会の信用はどうして得られるものであるかという、一言でいえば、責任を重んじ、誠心誠意を以て事にあたる。世の中で学問が必要である事はいうまでもないが、人間としての価値は学問のみによって定まるものではない。すなわち有用の人物として世に立ち、信用を得るには、平素の修養と誠意努力と相俟って進まなければならぬ。学問ばかりであっても、この方面に欠ける所があれば、それは立派な人物と称する事は出来ない。だから、最も必要なのは平素の修養である。絶えず修養に心掛けていれば、自然に常識も発達するし、知らず知らずのうちに人物も磨かれて行くのである。早い話が、大学を卒業したからといっても必ずしも立派な人格とは言われないが、中等教育さえ満足に受けない人であっても、推奨するに足る人物が少なくないのである。これらは全く不断の修養と人格の力であるから、社会の信用を得て大いに世の中に活動せんと欲する人は、信用を以て処世上の教訓となすべきである」¹⁵⁾。

日本型経営は、終身雇用、年功序列と企業別組合が三大特徴といわれるが、その本質はお互いが長期に信用しあうことである。

昔は社員も、定年まで仕事と給料を保証するという会社を信用していた。入社当初は給料が安くても、年月と共に給料がアップしていく年功序列賃金スタイルを受け入れること自体、会社を信用していることである。信頼関係を前提としているから、労働条件など必ずしも明確ではない。スーパーやファミレスでは、定時になったらパートタイマーはみんな帰るが、後の仕事は正社員がしている。正社員はサービス残業をするのが当たり前だった。これは、やがて店長になろうとか、いずれ賃金が増えるだろうと思っているから出来ることで、会社と正社員の間には深い信頼関係があるからであった。アメリカも一時期、日本型経営を導入しようとしたが、簡単にはできなかった。アメリカ人は日本人ほど会社を信用しないし、会社も社員を信用する気がないのである。これはやはり歴史の力である。

(3) 論語と算盤

渋沢は、経済とは何か、利益とは何か、国家の発展はそれらとどのように関係しているかについてもわかりやすく説明している。この渋沢の教えは戦前の経済人としては、必須の知識であったと考えられる。そして、不祥事が頻発している現代の企業及び経営者にとっても欠かすことの出来ない教えであろう。それを端的にまとめたものが『論語と算盤』である。これは、明治から昭和にかけて、渋沢が折りにふれておこなった講演を「処世と信条」、「立志と学問」、「常識と習慣」、「仁義と富貴」、「理想と迷信」、「人格と修養」、「算盤と権利」、「実業と土道」、「教育と情誼」、「成敗と運命」の10項目に集大成したものである。今は忘れ去られているが、戦前には多くの人々の愛読書でもあった。現代の日本人及び後世の人々にも重要な教えが随所にてでくるが、ここでは、字数の制約から簡単に紹介する。

渋沢は冒頭で次のようなことを述べている。

「今の道徳に依って最も重なるものともいふべきは、孔子のことに於いて門人たちの書いた論語という書物である。……富を成す根源（利益、算盤）は何かといへば、仁義道徳、正しい道理の富でなければ、その富は完全に永続することができぬ、ここにおいて論語と算盤という懸け離れたものを一致せしめる事が、今日の緊要の務と自分は考へてゐるのである。

……人間の世の中に立つには武士的精神の必要であることは無論であるが、しかし武士的精神のみに偏して商才というものがなければ、経済の上からも自滅を招くようになる。ゆゑに士魂にして商才がなければならぬ。その士魂を養ふには、論語は最も士魂養成の根底となるものと思う。それならば商才はどうかというに、商才も論語において充分養える。道徳上の書物と商才とは何の関係がないようであるけれども、その商才というものも、もともと道徳を以て根底としたものであって、道徳と離れた不道徳、欺瞞、浮華、軽佻の商才は、いわゆる小才子、小利口であつて、決して真の商才ではない、ゆゑに商才は道徳と離るべからざるものとすれば、道徳の書たる論語によつて養える。

……处世の巧みな家康公であるから、種々の訓言を遺されてゐるが大部分は論語から出たものだということが分つた、例えば“人の一生は重荷を負うて遠き道を行くがごとし”とあるのは、論語の曾子の言葉とまことによく合つてゐる。

また“己を責めて人を責むるな”、“及ばざるは過ぎたるより勝れり”というのは、孔子が教へ“堪忍は無事長久の基、怒りは敵と思へ”、“克己復礼”の意である。“人はただ身のほどを知れ草の葉の、露も重きは落つるものかな”は分に安んずることである。“不自由を常と思へば不足なし、心に望み起らば困窮したる時を思い出さずし”、“勝つこと計りを知りて、負くることを知らざれば、害その身に至る”とある、この意味の言葉は論語の各章にしばしば繰返して説いてある。

……ゆゑに私は人の世に処せんとして道を誤らざらんとするには、まず論語を熟読せよといふのである。現今世の進歩にしたがつて欧米各国から新しい学説が入つて来るが、その新しいといふは我々から見ればやはり古いもので、既に東洋の数千年前に言つておることと同一のものを、ただ言葉の言い廻しを旨くしているに過ぎぬと思はれるものが多い。欧米諸国の日進月歩の新しいものを研究するのも必要であるが、東洋古来の古いものの中にも棄て難い物のあることを忘れてはならぬ⁽¹⁶⁾。

このように明治時代において渋沢は、現代日本の風潮、経済学者、エコノミストの言説を予想していたかのように警告を表明してゐた。さらに興味深いのは武士道との関係で“武士道はすなわち実業道なり”と論じてゐる点である。

「武士道の神髄は正義、廉直、義侠、敢為、礼讓等の美風を加味した道徳である、しかして余がはなはだ遺憾に思ふのは、この日本の精華たる武士道が、古来もつぱら士人社会のみに行われて、殖産功利に身を委ねたる商業者間に、その氣風のはなはだ乏しかった事である。古の商工業者は武士道に対する觀念を著しく誤解し、正義、廉直、義侠、敢為、礼讓等のことを旨とせんには、商売は立ち行かぬものと考え、かの“武士は喰わねど高楊枝”というが如き氣風は商工業者に取つての禁物であつた。これは時勢の然らしめた所もあつたであらうけれども、士人に武士道が必要であつた如く、商工業者もまたその道が無くては叶わぬことで、商工業者に道徳は要らぬなどとは間違いであつたのである⁽¹⁷⁾。

また、

「とに角、此の富を致すという経済の事と私の主張する道徳とは一致を欠く事がしばしば有り勝ちである。而して余り道徳に傾き過ぎると、富貴榮達を嫌うようになるし、又功名富貴に囚われ過ぎると道徳などはそっちのけで目的の為には手段を選ばぬという弊風に陥り易い。従ってその何れに偏しても宜しくないが、中には道徳と経済とは到底一致すべからざる様に考えている人も少なくない。併し、これは皮相の見解であって、富というものは道徳と一致するものでなければ正しい富とは言い得ないし、道徳と経済は決して相反するものでなく、正しい道を履むことが即ち道徳なのである」⁽¹⁸⁾。

このような主張と関連して次のように教育問題にも言及している。この教育への考えは現代にも通ずる科学偏重主義の弊害を心配しての言葉である。

「私は道徳と経済の合一という事を多年主張して居り、私自身はこれを実践して来た積りであるが、今日の世の中を見るに、どうも知識の進歩という方に偏り過ぎて、全ての方面に上滑りの傾向が多いように思われる。これは時勢の変遷とも言い得ようし、教育の欠陥とも見られるだろうが何れにしても好ましくない風潮である。我が国の教育は古い時代には、むしろ精神教育に偏っていた様であるが、今日は昔と反対に科学的教育に偏しているため、精神教育の方面は余程閑却されている様に思われる。このように智育に偏して徳育の方が余り顧みられぬ結果、世の中は潤い味が少なくなって、人々は何れも自我に囚われ、私利私慾に走るといふ、甚だ憂う可き思想が盛んになって来たように思う」⁽¹⁹⁾。

そして、利己主義の蔓延と物質文明の偏重に流れていく当時の風潮を嘆き日本のあるべき進路を道徳とからめて述べている。

「世界の大勢は刻々に進歩しつつある。世界の日本である以上、日本もまたこの趨勢に順応して進歩するのは当然である。併しながら現今の状態を見るに、余りに西欧の物質文明を輸入するに急にして、精神方面を閑却している傾きがある。その結果一般の気風が実利一点張りに走り過ぎ、権利のみを主張して義務の方面をないがしろにし、総て利己心のみ走る傾向が顕著である。これは大に遺憾とする風潮であると思う。権利と義務とは併行すべきものである。而して真実の意義から言えば、義務が先で権利が後であるべき筈である。換言すれば義務を完全に果す時は、期せずして権利は伴うべきものである。

要するに経済上に於いても、政治上に於いても道徳と云うことは甚だしく見過ごされて、殆んど顧みられない状態である。この様な状態では、到底我が国の健全な発達を期することは難しい事と思う。若し現代の風潮の如く徒らに自己の権利のみを主張して義務を顧みなかったならば、ただに共存共栄の社会人としての原則に背くばかりでなく、遂に国家をして衰退の悲運に導くに到るなきやを恐れるものである」⁽²⁰⁾。

おわりに

1980年代の日本はエズラ・ボーゲルによって「ジャパン・アズ・ナンバーワン」として紹介され、学者やメディアは「日本の経営」を賛美していた。しかし90年代に入ると失われた10年だとか、15年などと言う一方、アメリカ経済の長期好況をみて、株主権論に基づくアメリカ型のコーポレート・ガバナンスこそを見習うべき「グローバル標準」だと世論をリードした。その結果が、小泉内閣に象徴される“構造改革なくして成長なし”であったのは先に述べた通りである。

しかし、小泉内閣の構造改革路線を次いだ安倍首相の自民党は07年の参議院選挙で歴史的な惨敗を喫した。安倍の突然の辞任を引きつぎ首相になった福田は急進的な構造改革によって生じた無視出来ない程の所得格差や地域間の格差拡大に対処すべく事実上改革路線を放棄することとなったのは当然の成り行きである。

構造改革を推進してきた人々及び若い学者、経営者は欧米で学位を取得した人が多かった。これらの日本の伝統文化に無関心のまま海外で教養を身につけた人たちは、欧米と日本の文明の違いが分らないまま構造改革を推進してきた。時代は再び変化を遂げようとしている。競って成果主義を導入した企業は衰退し、日本の経営が再評価されている。従業員の共同体意識の醸成から独身寮や社員旅行も見直されている。日本の会社が一度は捨て去った「古いスタイル」が再度、注目されているのである。これは一言で言えば渋沢が重視した“信用”が第一であることが再評価されていることである。

日本の経済発展をもたらせた原動力はいうまでもなく日本人の力であり、その日本人の生き方、経済的行動はここで紹介した二宮尊徳と渋沢栄一の実践を伴った教えが大きく影響していたのである。幸いにも二宮尊徳や渋沢栄一の伝統を引き継ぎ、成功を取め日本的経営の良さを実践し流布している名経営者は昭和の松下幸之助に続いて、京セラの創業者である稲盛和夫を初めとしてまだ数多く存在しているのは心強い。

ノーベル賞受賞の科学者アインシュタインが、1922年の来日の折に残した言葉は日本人に勇気と自信を与えてくれる。

「近代日本の発展ほど世界を驚かせたものはない。一系の天皇を戴いていることが、今日の日本をあらしめたのである。私はこのような尊い国が世界に一ヶ所ぐらいなくてはならないと考えていた。世界の未来は進むだけ進み、その間、幾度か争いは繰り返されて、最後の戦いに疲れるときが来る。そのとき人類は、まことの平和を求めて、世界的な盟主をあげなければならない。この世界の盟主なるものは、武力や金力ではなく、あらゆる国の歴史を抜きこえた最も古くてまた尊い家柄ではなくてはならぬ。世界の文化はアジアに始まって、アジアに帰る。それには、アジアの高峰、日本に立ち戻らねばならない。我々は神に感謝する。我々に日本という尊い国をつくっておいてくれたことを」⁽²¹⁾。

若い人たちは、日本という国にもっと誇りをもっていただきたい。そして先人の経済観、日本的経営を保守するだけでなく世界にも広めることが出来れば、現在ならびに将来の大きな課題である地球環境の維持にもつながるであろう。

注

- (1) 『日本経済新聞』、2007年9月7日付け記事、「成長を考える」で京都大学の間宮陽介は「市場原理主義のみでは、経済の領域で競争は良いことだが、すべてに当てはめるとゆがみが生じる」として、具体例として医療をとりあげた。そこでは、市場原理でいえば医師はサービスの売り手であり、患者は買い手。売買で価格がきまる。本来、医師と患者は共同の営みで健康を生み出すのに収益を追求した治療方法を求められれば、医師のモチベーションが下がる」と述べている。また構造改革は成長の前提ではないかとの問いに対して、「本末転倒ではないか。格差をつくって成長を実現しようというのが今の姿だ」とも言い切っている。

- (2) 『文藝春秋』2005年12月号、関岡英之「奪われる日本」で、日本の構造改革がどのようにして生まれたかを明らかにした。『年次改革要望書』という外交文書がそれで1993年の宮沢・クリントン日米首脳会議で合意されて以来、日米両国政府が相互に提出しあってきたもので、これまで日本で進められてきた「改革」のかなりの部分が、米国政府の『年次改革要望書』の要求を忠実に反映したものである。郵政民営化、新会社法もその一つである。
- (3) 盛田昭夫著、下村満子訳 『MADE IN JAPAN』 p.147, 148
- (4) 内村鑑三著、鈴木範久訳 『代表的日本人』 p.11
- (5) 内村鑑三著、鈴木範久訳 『代表的日本人』 p.110
- (6) 児玉幸多編 二宮尊徳 『二宮翁夜話』 p.54, 55
- (7) 児玉幸多編 二宮尊徳 『二宮翁夜話』 p.217, 218
- (8) 児玉幸多編 二宮尊徳 『二宮翁夜話』 p.207
- (9) 児玉幸多編 二宮尊徳 『二宮翁夜話』 p.208
- (10) 児玉幸多編 二宮尊徳 『二宮翁夜話』 p.209
- (11) 児玉幸多編 二宮尊徳 『二宮翁夜話』 p.216
- (12) 児玉幸多編 二宮尊徳 『二宮翁夜話』 p.314
- (13) 児玉幸多編 二宮尊徳 『二宮翁夜話』 p.215
- (14) 渋沢栄一 講述 『経済と道徳』 p.5, 6
- (15) 渋沢栄一 講述 『経済と道徳』 p.36~42
- (16) 渋沢栄一 『論語と算盤』 p.1~6
- (17) 渋沢栄一 『論語と算盤』 p.188
- (18) 渋沢栄一 講述 『経済と道徳』 p.36~39
- (19) 渋沢栄一 講述 『経済と道徳』 p.35
- (20) 渋沢栄一 講述 『経済と道徳』 p.155, 156
- (21) 波多野 毅 『日本賛辞の至言33撰』 p.18, 19

参考文献

1. サミュエル・ハンチントン著、鈴木主税訳 (1998) 『文明の衝突』 集英社
2. 児玉幸多編 二宮尊徳(1984) 『二宮翁夜話』『報徳記』中央公論新社
3. 渋沢栄一自伝(1984)、長 幸男 校注 『雨夜譚』岩波書店
4. 渋沢栄一講述(1953) 『経済と道徳』 日本経済道徳協会 非売品
5. 渋沢栄一 (1985) 『論語と算盤』国書刊行会
6. 盛田昭夫著、下村満子訳(1987) 『MADE IN JAPAN』朝日新聞社
7. 津本陽(2007) 『小説 渋沢栄一』幻冬社
8. 渡部昇一 (2007) 『渋沢栄一 男の器量を磨く生き方』致知出版社
9. 波多野 毅(2005) 『日本賛辞の至言33撰』ごま書房
10. 内村鑑三著、鈴木範久訳 (1995) 『代表的日本人』岩波書店

